

義民祭の空間構造

——1979年と2023年の比較

渡邊 泰輔

一 はじめに——義民祭とは何か

2023年9月2日から9月4日の3日間、筆者は台湾新竹県新埔鎮で行われた義民祭に参加した。台湾には、1787年に林爽文が起こした清王朝への大規模な反乱（林爽文の乱）を平定するために清王朝に協力し戦死した人々を義民として祀る義民廟が各地に存在する¹。この義民廟で毎年行われる大規模な祖先祭祀の儀礼が義民祭である。義民祭を中心的に行っているのは漢族の一系統である客家^{はっか}と呼ばれる人々で、台湾では四大族群（エスニック・グループ）の1つに位置付けられている²。義民祭は台湾各地で行われるが、新埔鎮のそれは最大規模である。特に本番である農曆7月20日（2023年は9月4日）は、屋外の広場に重量コンテストに入選した巨大な豚や山羊も展示され、夥しい数の参拝者が詰め寄せる³。今年は本人も客家である台湾総統・蔡英文（当時）が参加したこともあり、一時入場規制もなされた。

本稿は、義民祭の主な会場となる新竹県新埔鎮の「枋寮褒忠亭義民廟」（写真1）の空間構造に関する調査報告である。ここでいう空間構造とは、義民廟の構造及び義民祭のために設置された廟内の物の配置を指す。同儀礼に関しては、人類学者・植松明石が1980年に詳細なデータを記した論文を発表している（調査自体は1979年）[植松 1980]。植松は図1のように廟内をA～Dの4つの空間に分けて空間構造を記述している。4つの空間は廟堂内（A・B）と廟堂外（C・D）に大きく分けられ、台湾ではそれぞれ陽界と陰界に相当する[植松 1980：75]。本稿はこの区分に則り、約40年前のデータを参照・比較しながら現在の義民祭

¹ 台湾では林爽文の乱平定のために戦死したものを義民と呼んでいるが、他の地域では非客家との械闘（他の宗族との武力衝突）や戦争において国／集団を守るために殉死した客家を神格化したものを「義民爺」として祀っている[飯島・河合・小林 2019：131]。

² 四大族群とは、原住民族、閩南人（主に福建省南部から移住）、客家（主に広東省東部から移住）、外省人（1949年以降に移住）である。近年ではここに1990年代から増加した結婚により台湾籍となった東南アジア出身の「新移民」ないし「新住民」を加え、五大族群と呼ぶようになっている[玉置 2020]。

³ 豚は重量を競うが、山羊は角の長さを競う。

の空間構造を示すことを目的とする。



写真 1 枋寮褒忠亭義民廟 (2023 年 9 月 2 日、筆者撮影)

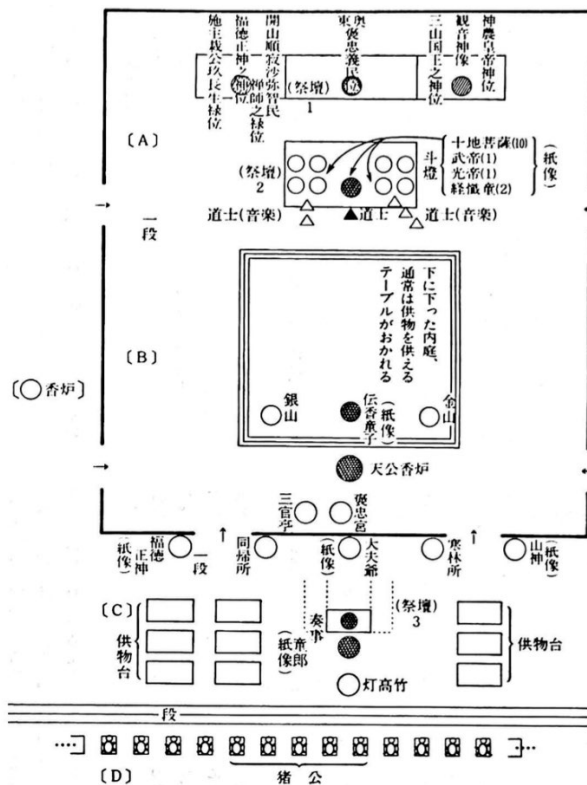


図 1 台湾新竹県新埔鎮下寮里義民祭場略図(1979.9) [植松 1980 : 74]

ただし、本稿は扱うのは義民廟内部の空間構造だけである。義民祭が行われる農曆 7 月は「鬼月」とも呼ばれ、冥府の鬼門が開かれ先祖や孤魂（位牌に書かれない死者）が徘徊するため中元節（日本のお盆に相当）も実施される。そのため、義民祭は中元節と融合して行われる。祖先祭祀の中でも特に孤魂に対する祭祀は「普度」と呼ばれ、寺廟を主体に複数の地域が共同で行う「公普」（義民祭の中元節はここに属する）と街・庄などより小さい単位で行う「私普」に分けられる。植松は義民祭＝公普だけでなく家庭での私普も観察しているが、本稿は義民祭が行われる枋寮褒忠亭義民廟内部の空間構造のみを対象とする。

義民廟は台湾北部を中心に数多く存在するが、本稿が扱う枋寮褒忠亭義民廟は其中でも最大級である。1790 年に完成した際は「義民廟」という名だったが、後に皇帝から戦死者の勇敢で忠義に溢れた精神を讃えられ「褒忠」の語を賜り褒忠亭義民廟になった [呉編 2012 : 16]。日本に占領されるなかで 1895 年に焼失したが、1905 年に有志の寄付により再建され、第二次大戦後には増築され現在の形に至った。

義民祭の開催は、1835年から周辺の13の村落が毎年持ち回りで担当していたが、1979年からは15の村落（庄）が交代で行っている⁴。2023年度は、五分埔祭典区（新埔鎮五埔里と関西鎮東平里の共同）が担当した。

義民祭の大まかな流れは以下の通りであった。まず1日目（2023年9月2日、農曆7月18日）は午前中から道士が読経や拝礼を行いながら、祭壇や供物台、紙像などの準備が徐々に進められる。この日はまだ人影はまばらである。2日目も引き続き朝から道士による読経や拝礼、環境整備が行われるが、午後には花柄の布で覆われた正方形の台の上に門の形をした紙の工作物を載せたものを川に流す、「放水燈」と呼ばれる儀式が行われる⁵。この段階になるとメディアを含め多くの人が見にきて、活気が出てくる。またこの日の夜には、重量コンテストに入選した豚の屠殺が行われる。植松によれば、当時は3日目の朝に数十頭の豚が廟内に運び込まれ一斉に殺されたそうだが〔植松 1980：77〕、現在では所有者が2日目の夜に各自行っている。3日目は、この豚に加え屠殺された山羊も広場に展示される。廟内では道士による読経、拝礼が絶え間なく行われ、参拝者が詰め寄せる。夜には片付けが始まり、豚は各所有者が持って帰り、紙像などは集められ廟の奥の山で燃やされる。

二 義民祭の空間構造

1 A空間

⁴ 15の村落は、六家、下山、穹林、大隘、枋寮、新埔、五分埔、石光、関西、大茅埔、湖口、楊梅、新屋、觀音、溪南である。

⁵ 牡丹の花は、しばしば客家の、また台湾の伝統的な模様として布や傘にあしらわれる。2022年度の放水燈は竹製のいかだの上に工作物を載せており、2023年度のような花柄の布を被せたものは例外だと予測される（【竹北門市】2022 義民祭典儀式・燃放水燈

<https://www.muji.com/tw/zh-tw/shop/211221/articles/areainfo/4581>）。

してこの香炉を中心に左右に黒い服に黒い長髯の「誌公師」（梁武帝の仏教の師）、黄色い服に黒い長髯の「梁武帝」（歴史上最も敬虔に仏を崇拝した皇帝）、青い服を着た「経懺童」⁶ 2体、白い服を着た「十地菩薩」十体の紙像が置かれている⁶。この祭壇(2)で特に重要なものとして、植松は「斗燈」を挙げている。これは缶の中に米（斗燈米）を満たしたもので、赤色の細長い紙に斗燈を奉納した者の名前を書いた「斗燈籤」が差し込まれている（これは義民祭に限らず様々な儀礼で用いられる）。植松は斗燈米上には義民祭 2 日目の午前に「涼扇」（竹の先に赤い紙で作った竿状のもの）が立てられるとだけ記述しているが〔植松 1980 : 73〕、筆者の観察では付随する要素が存在した（写真 4）。まず、階段状の赤い台座が祭壇(2)の左右に設置され、1 段に 2 つずつ斗燈が置かれる。これは 1 日目の夜には既に存在していた。斗燈には、植松のいう涼扇が立てられているほか、丸い鏡、七宝燈（赤い蠟燭の入った小瓶）、鈇、剣、定規、秤が立てられている。なお、これらの内容物は今日の斗燈では一般的なものであり、植松の時代との変化が反映されたものと考えられる。

⁶ 青い服を着た二つの紙像が「経懺童」であるかは、確認できておらず植松論文からの推測である。



写真2 祭壇(1)(奥)、祭壇(2)(手前) (2023年9月2日、筆者撮影)



写真3 祭壇(2) (2023年9月2日、筆者撮影)



写真4 斗燈 (2023年9月2日、筆者撮影)

2 B空間

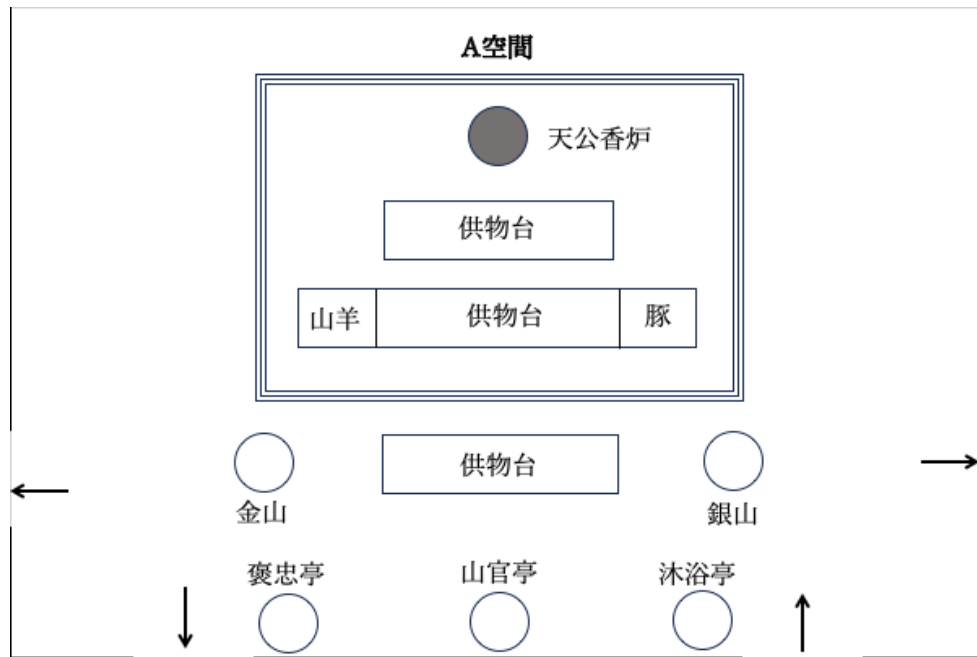


図3 B空間概略図（筆者作成）

B空間は廟堂内の入口側に広がる空間である（図3）。中央は1段下がった構造になっており、天に通ずるとされる。手前には供物台が設置され、左右には豚と山羊を模った大型の供物が置かれている⁷。奥には金色をした天公香炉があり、参拝者はここで拝礼を行う（写真5）。B空間手前側には、供物台を挟むように金山と銀山と書かれたそれぞれ金箔と銀箔が貼られた紙製の塔のようなものが置かれていた。そして入り口の壁に沿うように、義民爺が入る「褒忠亭」、三官大帝（天帝、地帝、水帝）が入る「三官亭」、孤魂が入る「沐浴亭」の3つの紙製の屋が置かれている（写真6）。3つのうち、褒忠亭と三官亭は机の上に置かれ手前には小さな祭壇が設置されているが、沐浴亭は地面の上に置かれ祭壇はなかった。

植松論文と比較すると、まず香炉が手前ではなく中央の1段下がった場所に置かれている。反対に金山と銀山は手前に置かれ、配置も左右逆転している。同じ中央部には伝香童子という祈願を伝える紙製小像が赤い香炉の中に置かれていると植松は記述しているが〔植松 1980 : 75〕、筆者は観察できなかった。また植松論文では左から三官亭、褒忠亭の2つが並んでいたのに対し、本調査では左から褒忠亭、三官亭と並び、最後に沐浴亭が置かれていた。

⁷ この供物台はメディアが押しかける義民祭3日目には撤去されていたが、香炉は据え置きだった。



写真5 天公香炉(奥)と参拝者 (2023年9月2日、筆者撮影)



写真6 褒忠亭(左)、三官亭(中)、沐浴亭(右) (2023年9月2日、筆者撮影)

3 C空間

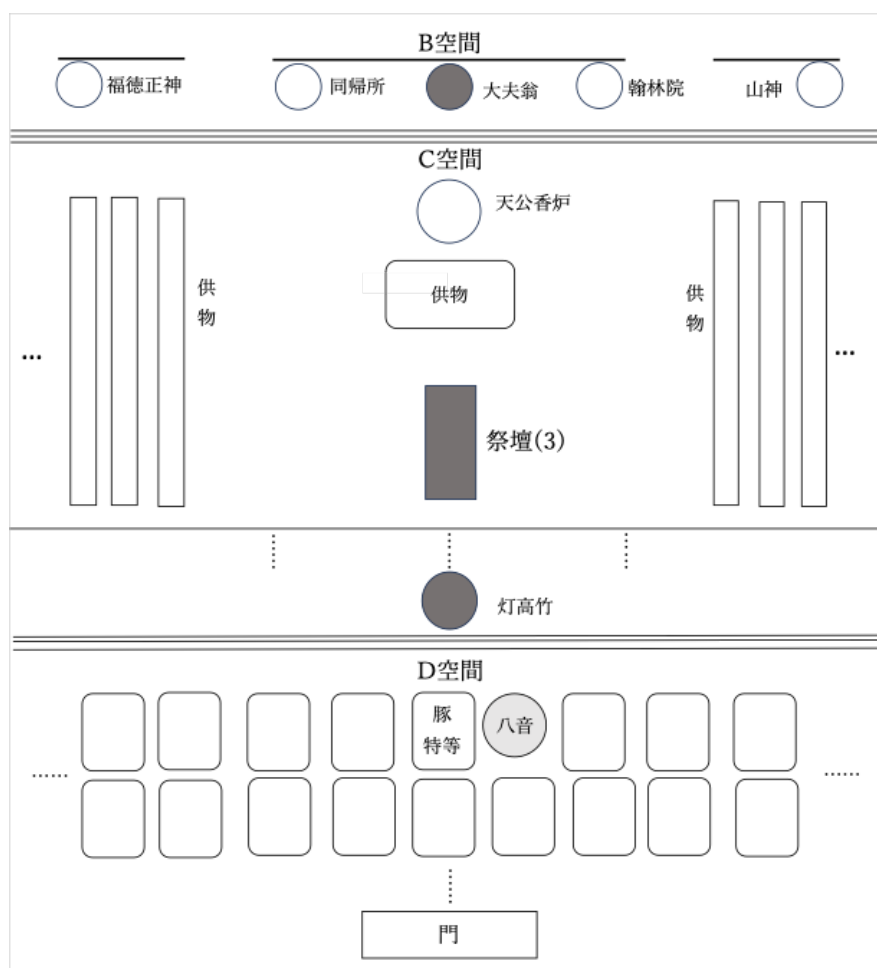


図4 C・D 空間概略図（筆者作成）

C 空間は廟堂（A・B 空間）を出た外部の祭場である（図4）。

まず廟堂（A・B 空間）のすぐ外には、五つの紙製の像と屋が置かれている。中央にある最も巨大なものは、孤魂野鬼の管理をする鬼の頭、鬼の王と言われている「大士爺」である（図11）。植松は当時（1979年）の様子を以下のように細かく描写している。

高さ約5米、顔面青色、眉金色、怒目、するどい牙2本、するどい歯、炎のように吐き出した赤い舌、白い角2本、赤いら髪、金色のイヤリング、甲冑を身にまとい、右手に義民節とかいた赤い三角旗をもつ。大士爺の頭上に観音大士の小糊紙立像（白い女性の顔で右

手に旗、左手に軸巻をもつ）がある。[植松 1980 : 75]

2023 年度のもの（写真 7）は、一見して植松の記述と大きな違いはない。細かな違いとして、眉が赤色、三角旗が黄色、観音大士はものを持たず顔はピンク色である（イヤリングは不明）。大士爺以外のものに関しても植松と筆者の観察には大きな違いはない。まず向かって一番左にある白髭を垂らし虎に乗る老人の紙像「福德正神」は、伯公（土地の神様）である。「同帰所」は、孤魂が来る紙製の屋で向かって右側が男性、左側が女性の孤魂用である。「翰林院」（植松論文では「寒林所」と表記されているが指すものは同じ）は、優れた文人や政治家の魂がやってくる紙製の屋で、二段構えになっており同帰所よりも豪華な作りになっている。福德正神と対をなすように右端には、緑色の虎に乗る黒髭を垂らした赤い顔の「山神」の紙像が置かれている。



写真 7 大士爺紙像（2023 年 9 月 2 日、筆者撮影）

大土爺らから 1 段下がった中央の広場には、奥に香炉、手前に祭壇(3)が置かれる。祭壇(3)は、祭壇(1)(2)と同様に義民祭 1 日目の夜には設置され、道士が拝礼を行う重要なものである（写真 8、図 5、写真 9、10）。これに関しても植松は以下のように細かに描写している。

この場所〔祭壇(3)〕には赤い紙で覆われた筒状の燈座 3 コ（天公神座）、香炉（米入り）、供物（上段＝天公、下段＝従神）、射馬（黄色い馬に乗った糊紙小像。奏事童郎。祈願を馬に乗って天に運ぶという）。この祭壇の両側には日本の青竹（先に葉がついたもの）が立てられ、その間に赤い紙を幕状にはる。〔植松 1980：75 〔〕内は筆者による注〕

一方、植松が記述していない供物の詳細を踏まえると筆者の観察結果は図 5 のようだった（図示したのは義民祭 1 日目夜に観察したもの）。上段（天公）の最奥には赤い紙で覆われた筒の上から煌びやかな紙が巻かれた燈座が 3 つ（天公神座）があり、そのすぐ下に中国の民間信仰における山の神である「西嶽金天順聖大帝御前」と書かれた黄色い紙の刺さった香炉（米入り）が置かれ、その両脇には七宝燈、さらに横にマンゴーと林檎が置かれる。香炉（米入り）の下には酒と茶が入ったガラスの小グラスが 3 つずつ置かれる。そして上段の最も手前には豆乾 3 皿、筍 3 皿、キクラゲ 1 皿、冬粉 2 皿、乾燥エノキ 2 皿、椎茸 1 皿が図示したように配置され、その横に赤い馬に乗った「日值功曹」（道教の神の 1 つ）の紙像が置かれる。祭壇の下段（従神）には、最奥に香炉（米入り）、その下に酒と茶が上段と同様に 3 杯ずつ、お菓子の入った小皿 3 つが置かれ、両脇には赤い饅頭とオレンジが 2 皿ずつある。そのさらに下、祭壇下段の最も手前には、長方形の銀のお盆に鶏肉と豚肉を乗せたものと米で満たしたものが置かれる。また祭壇自体を緑の葉を巻き付けた竹がアーチ状に覆い、根本には細長い黄色い紙が取り付けられている。植松の観察との違いは、祭壇(3)の両脇にある竹の形と奏事童郎が日值功曹になっていたことである。また、祭壇(3)は廟堂側の反対にも小さな祭壇が置かれている（写真 8 右）。植松はこちらについては記述していないので存在していたかも不明であるが、筆者が観察したものは以下の通りだった（図 5）。最奥（廟堂側）に鶏肉・豚肉・お菓子の入った大皿が置かれ、その下にお菓子の入った小皿 3 皿、さらに下に酒と茶の入った小瓶が 3 つずつ、そしてその両脇に林檎とマンゴーを乗せた大皿が配置されている。1 番手前（広場側）には香炉（米入り）が置かれ、両脇に七宝燈が置かれる。これらの物が配置されたテーブルの下には水の入ったバ

ケツがあり、これは神聖なものとされる。



写真8 祭壇(3)、廟堂側(左)広場側(右) (2023年9月2日、筆者撮影)

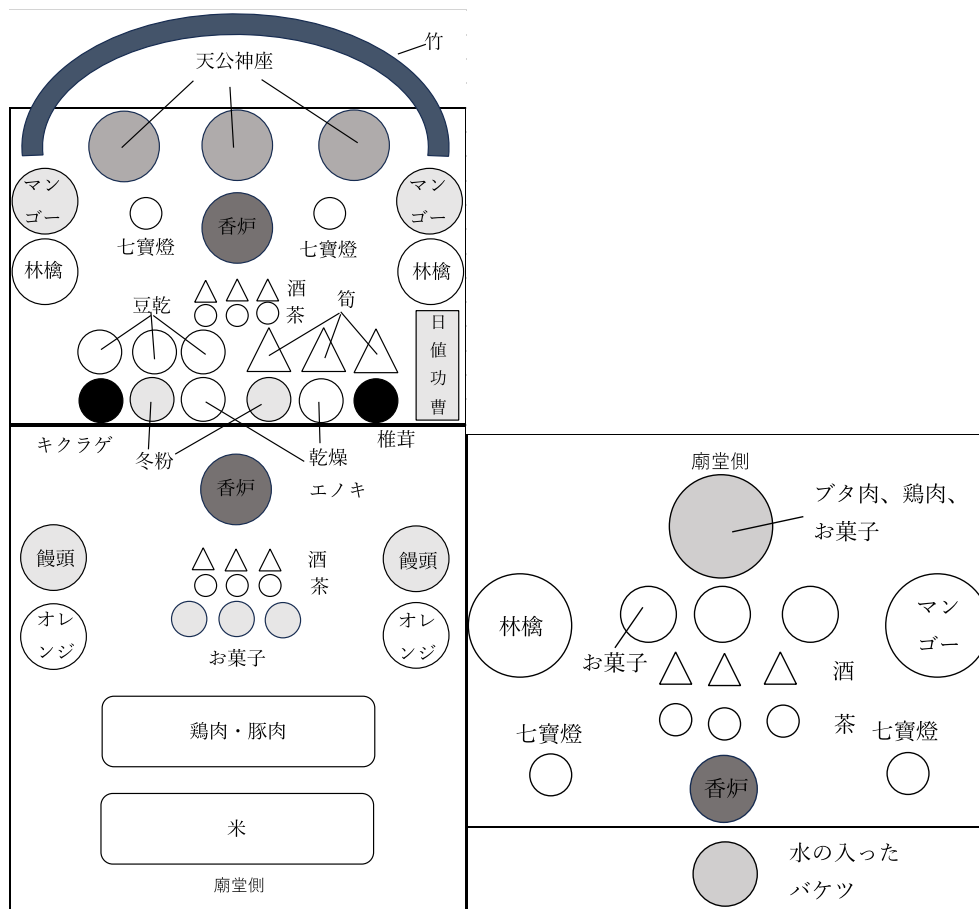


図5 祭壇(3)廟堂側(左)、広場側(右) (1日目夜を基に筆者作成)

C空間の最南端には「燈蒿」という20mあろうかという背の高い竹が1日目(2023年9月2日)の朝に3本設置される。竹は孤魂を招くためであり、鬼がこれを目指し灯のように飛ぶように見えると言われている[植松 1980: 75]。廟堂側から見て右側の燈蒿にはクラゲのような紙製の輪が七層組み合わせられた招魂のための「七星旗幡」⁸(色は上から赤・黄・緑・白・青・赤・黄)、左側の燈蒿には白い布が垂れ下がった神を招くための「韋駄幡」が飾られていた。一際高い真ん中の燈蒿には「七星燈」⁹(赤い紙が垂れ下がったもの)が飾られる。以上は現地スタッフに対する聞き取りによるものだが、植松は上記3つを「七層幡頭(赤い紙製)」「招魂幡

⁸ 筆者が「七星旗幡」と聞き取ったものについて、2021年の義民祭に関するネット記事では「招魂旗」と書かれていた(「新竹義民祭 傳統豎燈篙登場」<https://news.ltn.com.tw/news/life/paper/1468931>)。義民祭に関する資料(地方誌)によれば、吊るされた輪には六道輪廻の意味が込められているが[呉編 2012: 64]、筆者が観察したものは輪が7つあった。これの正式名称や輪の個数に関しては再調査が必要である。

⁹ 七星燈は七宝如来燈や七盞燈とも言う[呉編 2012: 64]。

(赤い紙)「招魂燈」と表記している〔植松 1980 : 75〕。

香炉と祭壇(3)の間には、3 日目に供物が設置される。香炉（米入り）や果物、赤い饅頭など他の場所で見られるものがほとんどであるが、特徴的な供物も存在した。例えば、半円柱状の台座の上に内蔵を取って毛を剥ぎ、頭に包丁を突き刺し口に赤い饅頭を咥えさせた豚や、地面に寝そべる豚を模った米などである。これらについて植松は記述していない。

4 D 空間

D 空間は C 空間のさらに外部に位置する広場である（図 4）。1、2 日目には何も設置されていないが、本番となる三日目（農暦 7 月 20 日、2023 年 9 月 4 日）の朝に屠殺された豚と山羊を乗せたトラックが運び込まれる。豚は重量、山羊は角の長さで競われ、等級の高い方が廟堂側に置かれる。この豚と山羊のコンテストは、客家のルーツである中国大陆の「中原」（現在の河南省・陝西省一帯）の習俗だとされている〔呉編 2012 : 22〕¹⁰。2 日目の夜に屠殺された豚は内蔵を取り除かれ、頭の後ろから背中にかけて等級と模様が刻まれ、口にパイナップルを咥えさせられ展示される（写真 9）。今年の特等の豚の重さは 1084 台斤＝約 650kg だった。植松が調査した 1979 年では、「専門の木枠の台にのせられ周囲を華やかに飾りたて〔中略〕猪公の前には 2 本の竹が立てられ赤い紙幕がたれる。その下に供物台があり、蠟台、香炉、三牲〔牛・羊・豚〕、ちまき、菓子、果物、三角旗などがおかれてい」たとされる〔植松 1980 : 77 〕内は筆者による注〕。2023 年度は、木枠の台がトラックに変化し、竹と紙幕がなくなった。供物も植松が記述したものに加え米や赤い饅頭が置かれているが、大きな違いはない。

1979 年当時は山羊が少なく代わりに羽を抜いた鶏やアヒルが木の台の下にぶら下がっていたが〔植松 1980 : 77〕、2023 年度は豚と同様に展示されていた（写真 10）。2023 年度の特等は、2.05 尺＝約 62cm だった。豚と比べると山羊の飾り付けは質素である。しかし、意図は不明だが山羊はサングラスをかけコミカルな出立ちに飾り付けられ展示されている。特等は Y シャツにネクタイを締めているが、他には葉巻を咥えているものもいた。供物もお菓子が数個並べてあるだけで、豚に比べると少なかった。

豚と山羊を乗せたトラックを除くと、D 空間には客家の伝統的音楽である「八音」の演奏団のスペースが設置されていた。義民祭 3 日目（2023 年 9 月 4 日）の昼頃には獅子舞が披露さ

¹⁰ 中原が客家のルーツであるという説に疑問を投げかける研究は少なくない〔河合 2012〕

れたり、セクシーな女性によるポールダンスも披露されたりした。



写真 9、10 2023 年度特等神猪(左)、特等神羊(右) (2023 年 9 月 4 日、筆者撮影)

三 考察と展望

これまで本稿では 1980 年（調査は 1979 年）に発表された植松明石の論文に則り義民廟内を A,B,C,D の四つの空間に分け、供物の詳細を含めながらそれぞれの空間構造を記述した。個々のモノの名称や宗教的意味合いには不明点も残るが、本稿の目的である 1979 年と 2023 年の空間構造を比較すれば、斗燈の形状や配置、廟堂内の紙製の屋の種類などに細かな違いが存在したが、それ以外については大きな違いはないと言える。しかし、これは植松が D 空間については他の空間に比べ詳述してないので断言できないが、1979 年との大きな違いは広場でのセクシーな衣装に身を纏った女性によるパフォーマンスだろう。広場に展示された豚たちは義民祭 3 日目の夜には各所有者が持ち帰り、各自盛大なパーティーを開く。筆者は特賞受賞者を含めた 2、3 の現場を訪れたが、いずれの場所でもセクシーな女性によるパフォーマンスが催さ

れていた。恐らく、彼女らを派遣する者がおり、そうしたパフォーマンスは慣習化されていると推測される。なぜこうした現象が誕生したのかは今後調査したい。

儀礼は連続性と創造性という一見相反する性質を内包するものだが [Strathern&Stewart 2021 : 1]、以上の調査結果、特に A～C 空間に関する調査結果は義民祭の空間構造における過去との強い連続性を示している。これは言い換えれば、どんなモノをどこに配置するかについて過去から現在まで知識がある程度伝承されてきたということである。しかし、だから創造性＝変化の面がなかった、と言い切ることはまだできない。なぜなら、本稿でも部分的に記述したが義民祭の空間構造は徐々に構築されるものであり、果たして主催者がどのような知識に基づきモノを配置しているかについては調査できていないからである。また、D 空間の構成に関しても文献調査や現地聞き取り調査が不足している。

知識は一つのコミュニティ内部においても多様である [渡邊 1986]。本稿を含め他の研究やメディア報道では義民祭を「客家」の儀礼として扱ってしまう傾向にあるが、その「客家」の中の多様性にも目を向けなければならない。義民祭を交代で担当する 15 の村落それぞれにおいてどのように知識は継承されているのか。筆者が調査した際にも義民祭の末端で働く若者を何人も見かけたが、一つの担当村落内部の知識にはどのような多様性があるか。義民廟内で行われる祭祀（公普）だけでなく、家庭で行われる祭祀（私普）の場合は、どのような知識に基づき空間構造が構築されているのか。本稿に残されたこれらの問いを明らかにすることで、空間構造や義民祭そのものの連続性と創造性を探究できることだろう。

謝辞

本調査は、人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業「海域アジア・オセアニア研究プロジェクト」の共同調査中で行われた。共同調査では河合洋尚先生（東京都立大学）、横田浩一先生（人間文化研究機構・東京都立大学）、奈良雅史先生（国立民族学博物館）、そして大学院生の田井みのりさん（東京都立大学）、益田喜和子さん（慶應義塾大学）、柴山元さん（京都大学）と共に行動した。調査員ごとにテーマは異なり、筆者は義民祭の空間構造を担当し、本調査結果を得た。名前を挙げることはできないが、調査を許可していただいた現地の義民祭実行スタッフの方々に、ここで感謝の意を申し上げたい。

参考文献

- 飯島典子・河合洋尚・小林宏至 2019『客家——歴史・文化・イメージ』現代書館。
- 植松明石 1980「台湾漢人（客家村）の中元節——祖霊祭祀に関する予備的報告」『日本民俗学』129: 60-81。
- 河合洋尚 2012「『民系』から『族群』へ——1990年代以降の客家研究におけるパラダイム転換」『華僑華人研究』9: 138-148。
- 玉置充子 2020「台湾の対東南アジア関係の進展と社会の多元化」『拓殖大学台湾研究』4: 29-57。
- 渡邊欣雄 1986「民族知識の動態的研究——沖縄の象徴的世界再考」『国立民族学博物館研究報告別冊』3: 1-36。
- A. J.Strathern & P. J.Stewart. 2021. Ritual Studies: Whence and Where to?. In A. J.Strathern & P. J.Stewart (eds) The Palgrave Handbook of Anthropological Ritual Studies, pp. 1-14.Springer Nature Switzerland AG.
- 呉家勲編 2012『慶祝建国一百年新竹県褒忠亭義民節大茅埔聯庄祭典專輯』南天書局有限公司。

資料

- MUJI 無印良品「【竹北門市】2022 義民祭典儀式-燃放水燈」2022 年 8 月 19 日
https://www.muji.com/tw/zh_tw/shop/211221/articles/areainfo/4581 2024 年 3 月 25 日
閲覧
- 自由時報「新竹義民祭 傳統豎燈篙登場」2021 年 8 月 26 日
<https://news.ltn.com.tw/news/life/paper/1468931> 2024 年 3 月 25 日閲覧

(わたなべ・たいすけ 東京都立大学大学院)